



地域日本語支援ニュース こだま 第 307 号

2016.11.10



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

====目次=====

1■ともに生きる■

外国にルーツをもつ子どもたちの笑顔のために

浦山太市

2■高校進学進路ガイダンス情報（11、12 月）■

=====

1■ともに生きる■

外国にルーツをもつ子どもたちの笑顔のために

東京・葛飾 浦山太市

-----  
今回は葛飾区のボランティア団体「なかよし」をご紹介します。「なかよし」は子どもが好き、子どものために何かしたいという思いで、外国にルーツをもつ子どもたちの支援を始めました。浦山さんは公立小学校勤務中の担任・校長時代に外国からの転入生と関わり、退職後は区立総合教育センターの適応教室、不登校児童生徒の学習支援に携わりました。母子家庭など家庭環境の厳しさ、友人関係でのトラブル、いじめ、言葉の不自由が招く周囲の無理解……などなど、問題に直面するたび、子どもたちに寄り添い続けられる場の必要性を痛感したと言います。「なかよし」は子どもたち皆の笑顔のために活動を続けています。  
-----

◆活動を始めたきっかけ

以前から不登校児童生徒との関わりを続けていく中で、ここ数年、外国にルーツをもつ子どもたちが友だちとのトラブルや学校への不適応から不登校になっていく事例が目立つようになり、気になり始めました。そんななか、2010年夏、かつしか区民大学で企画された「外国人児童のための学習支援ボランティア講座」（教育委員会生涯学習課主催）を受講、その時のメンバーが中心となり2010年秋に発足したのが「なかよし」です。

#### ◆「なかよし」発足と目的

参加メンバーは多種多様でしたが、子どもが好きで子どものためになることを何かしたい、という気持ちは皆、同じでした。年齢層も40代後半から70代と幅広く、大人の日本語学習のボランティア経験者、元学校教師、元会社員、主婦等さまざまでした。

会の名称、目的や規約も皆で相談し決めました。研修していく中で、対象を「外国の子ども」から「外国にルーツをもつ子ども」に改めたりもしました。また、当初の規約には「交流」の言葉はなく、日本語支援、学習支援が中心であったのですが、子どもたちが心おきなく自国語で話せる、他の国の子どもたちと交流する中で異文化理解も深まる等の理由から、交流行事の必要性を感じるようになり、彼らの「居場所」として種々の行事も組むようになっていきました。

#### ◆現在の主な活動

##### <高砂中学校日本語教室での支援>

学習関連では、区内3か所にある中国ルーツの子どもたちのための日本語教室のうちの高砂中学校日本語教室が、日常的なボランティア支援の中心になっています。現在は、「なかよし」メンバー以外の方も参加していて、月1回のショートミーティングと、年3、4回のロングミーティングを行い、指導法の交流や教材研究、子どもたちに関する情報交換等を行っています。

##### <土曜学習支援>

月2回、土曜日の午後、高砂中に通っている中国ルーツの児童生徒の他に、区内の小中学校に通っているフィリピンやバングラディシュ等の子どもたちが来ています。無料で行っています。

#### <長期休業中の学習支援>

夏休みにたくさん出される課題・宿題、冬休みの書初め練習などを少しでも手助けできたら、ということで始めました。休みの前後に、合わせて4～5日、多いときは20人前後が参加しています。いつも会場とボランティア確保に腐心しています。

#### <教科書ルビふり>

通訳（学校長の要請により派遣される）をしている「なかよし」メンバーからの発案で始めました。決められた会場・時間になかなか参加できないメンバーがいつでもできるので好評です。これは入門期の児童生徒に大変役に立っています。

#### <交流行事>

料理会、アセアン交流会、国際交流まつり、漢詩かるた交流会、社会見学会、野外交流会（上野公園、理科大、柴又花火大会）、スポーツ会などを行ってきました。恒例になったもの、諸事情により続かなかったものなどいろいろあります。

#### ◆活動を通してわかったこと、見えてきた課題

定例会等で話題になってきた悩みや課題は、対象が「子ども」であることから生じていることが多いと思っています。よりよい関わりをしようとする、どうしても家庭や学校、担任の先生との関係も必要……と思うようになります。もっと言えば行政、教育委員会との連携も。しかし、ボランティアにとって、これらのハードルはとても高いものです。

#### <家庭との関係>

家庭と連絡を取り合うことの難しさは、家庭状況により千差万別です。日本の子どもたちと同様、親の教育に対する意識の高低浅深は、子どもの学習や言葉の成長・発達に大きな影響があります。私たちがどこまで関われるのか……やるべきことが際限なく広がることへの不安もあります。

現在、家庭との間で必要な連携、情報交換、話し合いは、時間的制約の中、きわめて不十分ではあるものの、個々の子どもとの関わりの深いスタッフを通してなんとか行っています。とくに学校で通訳として関わっているメンバーの

力が大きいと思います。

#### <学校との連携>

学校との連携は家庭との連携の比ではなく、とてもハードルが高いと感じます。特別な日本語教育をしている学校はほとんどなく、週に1回か2回、2時間（年間60余時間）ぐらい通訳の補助がある程度です。私たちがボランティアで関わっている児童生徒の状況と、学校での様子をお互いに伝え合えたら、子どもにとって大きなプラスになるはずなのですが。一日も早く、この辺りのシステムができれば願っています。通訳として関わっているメンバーがいる時には、学校と必要な連絡が取れる時もあるって、その効果を実感しています。

#### <行政との関わりの中で>

行政(葛飾区・教育委員会学校教育部)や学校(小中学校)とどう関わっていくかはなかなか難しいものですが、私たちの生みの親であり、よきアドバイザーでもある教育委員会生涯学習課には大変お世話になっています。本当に感謝です。

現在、葛飾区内の日本語教室は中国児童生徒のみが対象で、教育課程外です。東京都に報告されている日本語学級は0。行政・教育委員会の責任として教育課程内での指導体制が確立されることの必要性を強く感じています。これが実現すれば、日本語に悩み学習が進まない子どもたちへの大きな推進力になるものと信じています。

大きな進展もありました。「なかよし」発足時からの念願であった「子ども多文化センター」的なものの設置について、教育委員会や校長会、そして区議会のご尽力により、今回の葛飾区の中期計画に入れていただけたのです。これは、第8期葛飾区社会教育委員の会議による提言「国際化、グローバル化する社会を生きる子どもの育成について～違いを豊かさに～」(平成25年)が大きな後押しになりました。有難いことでした。

この組織ができて、行政(学校)が真剣に外国ルーツの子たちに目を向けるようになれば、私たちの悩みの大半は解決でき、区内の小中学校に通う子どもたちにとっても大いに喜ばしいことになります。「なかよし」の活動も第二段階に入ります。一日も早くそうなることを願っています。

---